

母親が幼児に対して行っている食教育と母親が幼少期の家庭で受けた食教育との関連

026

○木田 春代*1, 武田 文*1, 朴 峠 周子*1, 藤原 愛子*1, 鈴木 淳子*1,
鈴木 梢子*2, 浅沼 徹*2, 門間 貴史*2

(*1: 筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻,

*2: 筑波大学大学院人間総合科学研究科体育学専攻)

【背景】近年の社会情勢の変化により、栄養の偏りや生活習慣病の増加などの健康問題が生じており、子どもたちに対する食育は、生涯にわたる健全な心と体をはぐくむ基礎と位置づけられている。幼少期の食生活と母親が幼児のために作る食事や大学生の子育てイメージとの関連が報告されており、食教育が世代間連鎖することが示唆されているが、その数は少なく、母親が幼児に対して行っている全般的な食教育と幼少期の食生活の関連についての報告は見あたらない。

【目的】幼児を持つ母親が行っている食教育と母親が自身の幼少期の家庭で受けた食教育と連を明らかにする。

【方法】A 県公立幼稚園 15 か所の園児の保護者 1145 名を対象に、無記名自記式質問紙調査を行った。回収数は 794 部 (回収率 69.3%)、有効サンプル数は 759 部 (有効回答率 66.3%) であった。質問項目は①属性②幼児に対して行っている食教育 (「好き嫌いをしないように言っている」など 16 の質問項目に「よくあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」で回答) ③幼少期 (幼児から小学校卒業のころまで) に受けた食教育 (「好き嫌いをしないように言われていた」など 16 の質問項目に②と同じ選択肢で回答) とした。

【結果】母親が幼児に対して行っている食教

育のうち「好き嫌いをしないように言っている」などの項目の実施率は 90%以上であったのに対し「料理をするとき、お子様に手伝わせている」といった項目は実施率が 50%程度であり、幼少期にこれらの食教育を受けた人の割合も同程度であった。また、幼児に対して行っている食教育のすべての項目において、「よくあてはまる・まああてはまる」と回答した者は、そうでない者よりも、幼少期の家庭において同様の食教育を受けてきた者の割合が有意に高かった。

【考察】母親が幼児に対して行っている食教育は、自身が幼少期の家庭において受けてきた食教育と全ての項目で関連していた。先行研究において、幼少期の食生活が自身の子育てとの関連が報告されており、社会情勢が変化しても世代間連鎖する可能性が考えられた。とくに本研究においては「好き嫌いをしない」といった基本的な食育の事柄について調査しており、幼少期における食教育の重要性が示唆された。

【結論】幼少期の家庭における食教育は、その後、母親となった時点で幼児に対して行う食教育の要因である可能性が考えられ、幼児に対する食教育を行う上で、その養育者である保護者、特に母親への食教育の重要性が示唆された。

(連絡先) 木田春代: 筑波大学大学院人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻

haruyo.k@hcs.tsukuba.ac.jp